

『余地』

～相談業務を楽しむ方法 12～

<つながっているという感覚>

杉江 太郎

～とある施設からの連絡～

どの施設にも、関係性の深い、長い付き合いの職員がいる。同じ子どもを担当し続けているわけではないが、電話で話すたびに、当時担当した子どもの近況を分かち合い、そして、プライベートの話に派生する……。それは、とある子どもを巡って、お互い協力し合い、チームとしてアプローチしてきたことによる結果だと思っている。そんな職員から、もう 20 歳をゆうに超えた元子ども（仮に A とする）のことで、急に連絡が入った。A は高校卒業と同時に、で就職をしたが、特に頼れるような親族もおらず、1 人暮らしを続けていた。私は、年に 2 回ハガキを送る程度の関わりは継続していたが、特に A から連絡が届くこともなく、毎回、同じ場所にハガキが届いていることを理由に、勝手に「生きていること」と「同じ家に住み続けていること」くらいしか把握していなかった。便りが無いのが元氣な証拠と勝手に思っていた。

そんな状況で、当時担当していた職員からの連絡である。A に何かあったのか、仕事を辞めたのか、アパートを追い出さ

れたのかなど心配事が頭をよぎる中、その職員が言ったことは「A が交際しているパートナーと同棲することになった」という拍子抜けするような話であった。

しかし、ただの報告のためだけの連絡ではなかった。A はパートナーと、高校時代からの付き合いである。施設で生活している間にも一度交際していた期間があったが、卒業の頃には別れており、そして社会人になって、再度交際を開始したということであった。A は、パートナーと同棲するに当たって、事前に相手の家に挨拶に行ったそうである。なんとも律儀な話である。パートナーの親は、A の境遇に理解を示し、同棲を認めた。付き合い自体は長く、お互い結婚を意識した同棲のようである。しかし、パートナーの親が、ふと、A の戸籍はどうなっているのかということをお口にしたらしい。そこにどのような意図があったのかはわからない。跡継ぎのことなのか、出自にまつわる疑問なのか、婚姻後の姓に関することなのか。A はそれを聞いて、自身の戸籍がどうなっているのかははっきりと知らないことに気づき、当時担当の職員

に相談をしてきたとのことであった。

実は、私と A は施設を退所するに当たって、一緒に過去の振り返りを行った経緯があった。その中で、A の親の状況についても触れていた。職員はそのことを覚えており、私にもう一度 A と出会うてもらえないかと相談を持ち掛けてくれたのである。

～生活歴の共有～

「ライフストーリーワーク」という言葉がある。施設で生活する子どもが前向きに生きていく為に、子ども自身の生い立ちを整理するという実践である。私は、方法論にとらわれることが嫌いなので、「ライフストーリーワーク」という言葉を用いて、子どもと面接をすることは無いが、子どもの生い立ちを整理して、共有し直す作業については、この仕事を行う上での責務だと考えているので、特に 18 歳（退所）が近づいた子どもについては、なぜ家から離れて暮らすことになったのか、今現在、親が何をしているのか、今後の生活をどのように構築していくのか等、職場が持っている情報を元に、振り返りを行うことが多い。

また生い立ちだけではなく、例えば、親の名前、生年月日、祖父母のこと、きょうだいのことなど、家族から離れている期間が長くなると、そのことを知らないまま、施設を退所していく子どももいる。そうではなく、通常の 18 歳が知っ

ている事柄については、当然、知っておくべきだと考え、そのことは大人が責任を持って伝えておくべきことである。

A ともそういった振り返りは行ってきたが、18 歳を区切りしたこちらの都合と、A 自身の疑問に思うタイミングがずれていたこともあったのだろう。改めて、A に出会いに行き、今度は、A の自然発生的な疑問に対して、一つずつ答えることにした。A に対して、全てを伝えきれていなかったことについて反省をしつつ、一方で、A が施設職員を頼り、その施設職員が私に連絡をくれたことに対して、この関係性が築けていて良かったと思う出来事であった。

～公的から私的な関係への移行～

児童相談所としての関わりを終え、その後、成人になった元子どもと、個として連絡を取っている元子どもが、私自身尾歳を重ねるごとに増えてきた。とは言っても、高校卒業、大学入学、進級、就職活動、大学卒業、就職など大きなライフイベントなどを中心に、連絡をして、近況を確認する程度の細々とした関係である。直接何かが出来るわけでもなく、遠方にいると会うことも出来ない。しかし、細々と繋がっておくことは、私自身がこの仕事をする上でのモチベーションであると同時に、A のように、突発的な事象があったときに繋がるきっかけになるのではないかとも思っている。

また、子どもだけでなく、当時一緒に担当した職員との関係もそのまま継続されている。それは、1人の子どもをきっかけに出会い、その子どもの生活の質の向上を共に目指した者同士が、子どもを媒介として繋がり続ける。そうした出会いは、決して多くはないが、長期間継続することで生まれる確率も増える。中には、2年、3年という短いスパンで巡り合うこともあるかも知れないが、その可能性は限りなく低いのではないだろうか。長く続けていることで、1つの出会いが醸成され、その繋がりが強くなっていくのではないだろうか。

～醸成されていく関係性～

今、私の職場では、2年から3年ごとに担当地域が替わることが多い。短ければ、1年で替わってしまうということもある。それは、人事異動に伴う場合もある。離職に伴う場合もある。担当地域が替わることは、担当する子どもが替わることに繋がる。子どもの立場で言えば、今まで会いに来ていた大人が3月末でいなくなり、4月に知らない大人がやってくるという体験となる。

そんな現状から、地域や施設から、担当者が替わりすぎているとお叱りや不満を受けることは、この業界では良くあることではなかろうか。

そのような短いスパンでは、先ほど書いたような「公的な関係から私的な関係

への移行」に巡り合えるはずがない。私の場合は、幸運なことに、同じ地域を6年担当することができ、その後も同じ職場にいたので、長い子どもではもう10年以上の付き合いともなる。出会った当時、小学生だった子どもは、もう大学生になっている。立場上、生活を共にすることはないが、連続性を担保にしながらい出会い続け、生活場面を間接的に共有し続けることが、18歳以降も連絡を取りあう関係性に繋がっている。

対人援助職と言いながら、短いサイクルでの仕事が続くと、当人も連続性を持ちにくく、関係性は深まらない。それは子どもとの関係もそうだが、援助職者同士の関係も同様であろう。そんなことでは質の高い仕事は期待できない。そしてそのことが離職にも繋がっているのかもしれない。先日、私の職場でも2年もたたずに職員が退職してしまった。少なくとも、私が感じている、関係性の深まりを感じる間もなく辞めているはずである。

この職場は、確かにストレスフルである。そして社会情勢の煽りを受けやすく、その中で求められるものも多く、勤務先としての人気は高くはないようである。しかし、私自身は、長く続けることで、様々な繋がりが生まれ、関係性も深まっていくように感じている。そして関係性が醸成されていくことが、仕事を続ける上でモチベーションになっている。

長く続けるためには、関係性の深まり

(=醸成)が必要である一方で、関係性が築かれないと長く続けられにくい。その出会いを巡っては、「運」が左右されるのかもしれないが、少なくともそのような関係性を深められたときには、『子どもに対して個人として興味を持つこと』『選択肢を多く持ち、その中で、子どもの将来の為に、少しでも良い選択をすること』『子どもの過去や境遇を子どもの責任にしないこと』『子どもの社会による不遇な体験を代弁すること』などの姿勢が共通しているように思う。このことについては、いずれ別の機会に、詳しく書いてきたいと思う。

～限られた力量～

個人の力量としては限られている。しかし、実践を踏む中で、多くの子どもとの出会いがあり、その一人一人が、それぞれの人生を歩んでおり、それぞれの困難さを抱えていた。その一つ一つに共に立ち向かう子どもと仲間がいたからこそ、この仕事を続けることが出来ている。

この業界は、公務員集団であり、3月末の人事異動を想定しながら仕事をしている職員もいる。専門職と言われながらも、実際は人事異動で他の役所から異動してきたという、福祉に一切携わってこなかった職員がいるのも事実である。しかし、専門的な知識や技能を抜きにしても、まずは、目の前の子どもの将来を第一に考え、単なる仕事の1つとして片づ

けるのではなく、一人の子どもの人生に関わっているという事実を受け止めて、仕事を続けていかなければならないだろう。そうした姿勢を持ち続けたときに、『醸成された関係性』との巡り合いがある。そしてその巡り合いが一度でもあれば、この仕事の虜になるはずである。だからこそ、私はこの仕事を続けたいと思い、続けられているのであろう。